

第16章 重力制御の応用

われわれの考えによれば、重力を制御することは現代の技術でも十分可能であるが、このことにどんなメリットがあるのでしょうか。既にこのことについて述べてきたから、重力制御がいかに有用なものか既にお気付きのことであろうが、その有用性について指摘しておくことにしよう。

われわれの考える重力制御の基本的な考え方はいたってシンプルである。質量を持った物体があれば、その物体は重力場の源である。もし、その物体が動くならば、周りの重力場も動くであろう。物体を動かすことによって、周りの重力場が動くとすれば、重力場を動かしたことになる、物体の動かし方によって、周りの重力場の動かし方を変化させることができる。重力場の動かし方を変化させたということは重力を制御したということである。

現代の社会においても既に重力制御の応用例は存在している。例えば、巨大なジャイロを船舶に設置すると、その船舶の揺れを防ぐことが経験的に知られており、このことは既に工業的に応用されている。また、ジャイロは航空機などの傾きを判断する計測器としても応用されている。これらは、ジャイロによって制御された重力場と地球の重力場との干渉効果を応用したものである。

この他に、ダウジングという超常現象（既存の物理学でわからない現象であるから確かに超常には違いない）と考えられている現象もおそらく重力的な現象であろう。ダウジングというのは、L字型の棒を2本八の字に開いた道具を使って、地下の水流などを発見することができるといったものであるが、水流によって生じる周りの重力場の流れによって、棒が開いたり、閉じたりする反応が見られるのであろう。また、振り子のようなものを使ったダウジングというものもあるが、振り子というものは運動する重力場の源であり、振り子が場所によって違った反応をするのは、振り子がつくる重力場と、それ以外の重力場の干渉効果によるものであろう。このよう

な効果はジャイロが地球に対して一定の向きを向こうとすることと基本的に同じであろう。

このような効果が発見されてから、既に何百年、あるいはそれ以上たっているだろうが、このような効果の物理的な理由というものは既存の物理学の知識ではわからないものなのである。物理学者はこのような効果の理由がわからなくても平気な顔をしており、本来やるべきことをせずに過度に数学的なあまり役に立たないようなことに熱中している。物理学者は自分達に理解できないダウジングのような現象は、「いかさま」であると決めつけがちであるが、ジャイロの現象は「いかさま」と言わないのは奇妙なことである。彼らはコマが何故倒れないのか、ということも説明できないのに、近い将来すべての物理学の法則を統合できるような方程式が見つめられると本気で思っている。彼らの思考過程は何でもアリだから、彼らにはこのようなことも可能なのであろう。それに対して、われわれは永久機関というものを作ることが可能であると本気で思っている。客観的に見れば、どちらも同じようなものなのかもしれないが、研究対象としての優先順位は、われわれの方が先であろう。

これから述べられる重力制御の応用について、物理学者は「信じられない」と言うかもしれないが、彼らには信じるか、信じないかを判断する資格はない。彼らには「わからない」ことだからである。もし、彼らがわれわれの考えは間違っていると主張したいならば、最低限、ジャイロの効果ぐらいいは説明できなければ、その資格はないということである。

16.1 非対称質量分布の回転重力場による推進機関

第14章でも述べたように、図16.1のように回転軸に対して非対称な質量分布を持ったジャイロを高速に回転させると、図のような推進力が発生する。この推進力の方向は軸に沿って、ジャイロの質量分布の大きい方から小さい方へ向いており、ジャイロの回転方向によらない。このジャイロを地球上などの外部重力場の中で回転さ

せると干渉による推進力が加わり、推進力の方向が変化する。例えば、回転軸を図のように水平面と平行とし、図のような回転方向ならば、干渉による推進力は回転軸に直交し、紙面の表側から裏側へ向けて働く。注意しなければならないことは、このジャイロを空气中で回転させるならば、流体力学的な効果（翼の揚力と同等の効果）により、図の推進方向と反対方向に推進力が加わるため、全体としての推進力が低下する可能性があることである。重力による推進効果をはっきりさせるためには、このジャイロは真空中で回転させるべきである。この重力による推進力は、反作用の効果によるものではないから、押すための空気のようなものは必要ない。大気中、真空中を問わず、推進力を発揮することができる。

この推進力は、重力によるものであり、回転軸での機械的な抵抗がないとすれば、外部からエネルギーを供給し続けることなく、ジャイロは永遠に回転するだろう。その間にもこのジャイロ全体には推進力が働くから、この力を利用すれば、発電などに利用できるだろう。この推進機関はいわゆる永久機関になりうるものである。

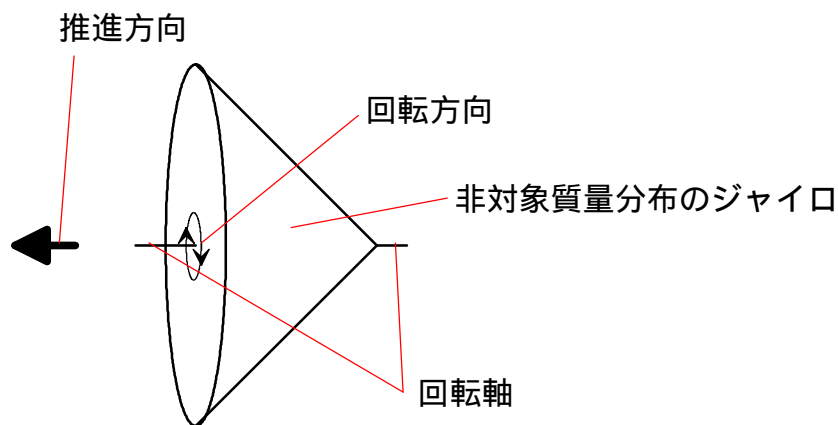


図16.1 非対象質量分布の回転重力場による推進機関

この推進力は、ジャイロの形状を適当にし、ジャイロの半径、質量、回転速度を大きくすればするほどより大きな推進力が発生するだろう。この推進機関の推進力は、玩具のジャイロを使ったまったく簡単な実験で確認できる程であり、ジャイロの効果は巨大な船舶を安定させるほどなのであるから、より大規模な装置とすれば、かなり大きな推進力が発生すると想像される。この推進力が十分大きければ、この推進力を飛翔体の推進機関にすることも可能であろう。この方法として、この推進機関を3つ以上組み合わせ、3つの推進機関の回転軸の方向を独立に自由に制御できるようにすれば、飛翔体の姿勢、推進方向、推進力をジャイロの回転速度を変えずに制御することが可能になる(図16.2)。

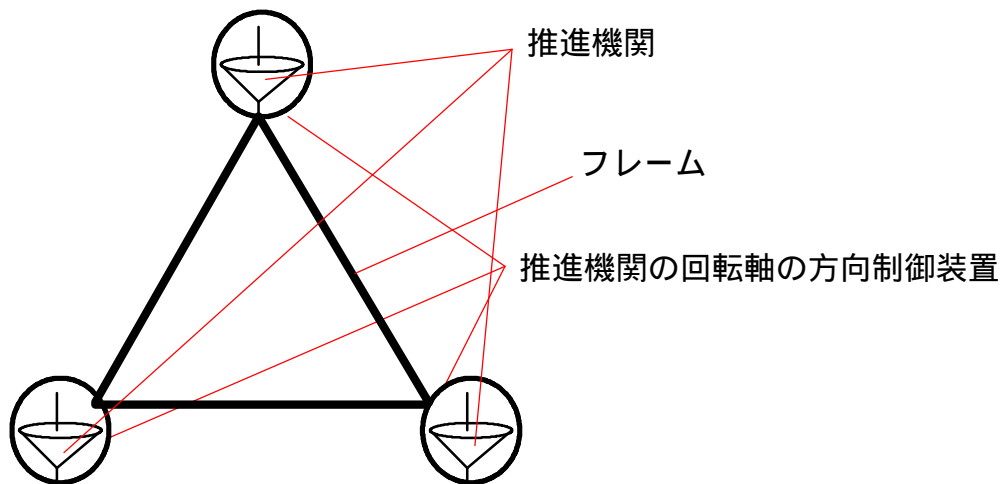


図16.2 飛翔体の基本構造(平面図)

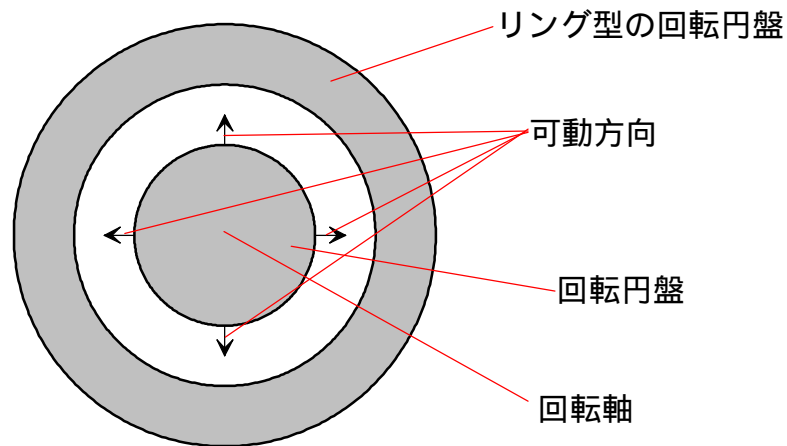
16.2 回転重力場干渉型の推進機関

空間的に非対称な重力場をつくれれば、その場内にある物体は推進することになるが、非対称の重力場をつくる方法として、図16.3のような構造も考えられる。リング型の円盤とその内側に円盤を置き、両者を回転させ、両者の相対的な位置を変化させることによ

り、非対称な重力場を発生させる。リング型の円盤と内側の円盤との相対位置を自由に制御できるようにすれば、飛翔体の姿勢、推進方向、推進力をジャイロの回転速度を変えずに制御することが可能になる。

内側の回転円盤を右側に動かせば、全体として左側に推進力が発生し、内側の回転円盤を上側に動かせば、全体として下側に推進力が発生する。

(1)平面図



(2)側面図

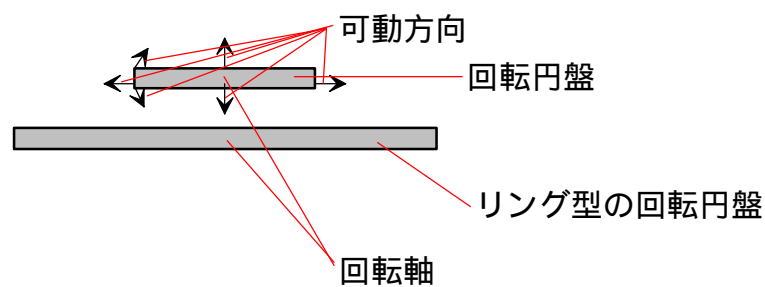


図16.3 回転重力場干渉型の推進機関の基本構造

16.3 重力発電機（フリーエネルギー装置）

16.1項の実験により確かめられている推進装置は、基本構造であるが、これから実際にフリーエネルギーを取り出し続けるのは難しい。円盤を回転させるための抵抗をゼロにするのは工学的に不可能だからである。

永続的にエネルギーを発生させるためには、連鎖的、自己増幅的な機構を持っていなければならない。それは図16.4、図16.5のような構造になる。

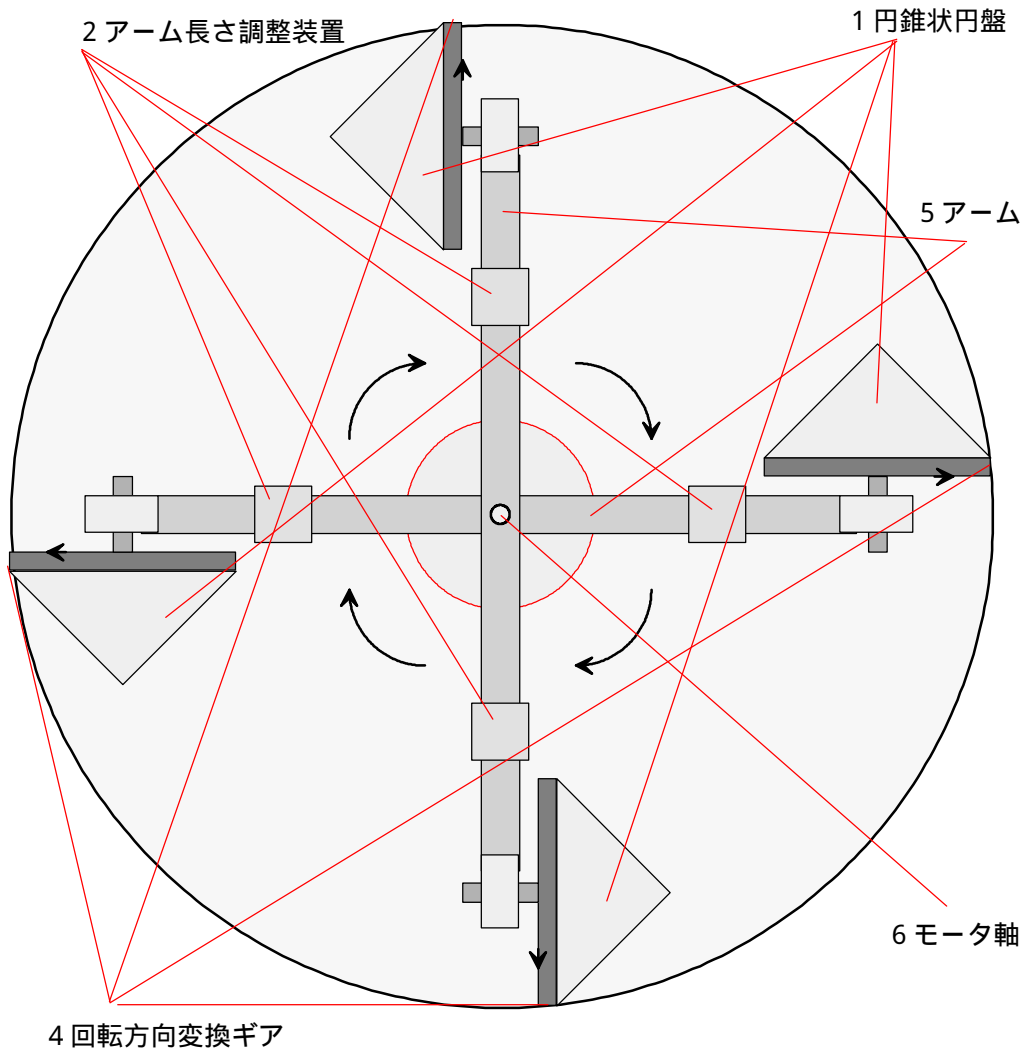


図16.4 重力発電機（平面図）

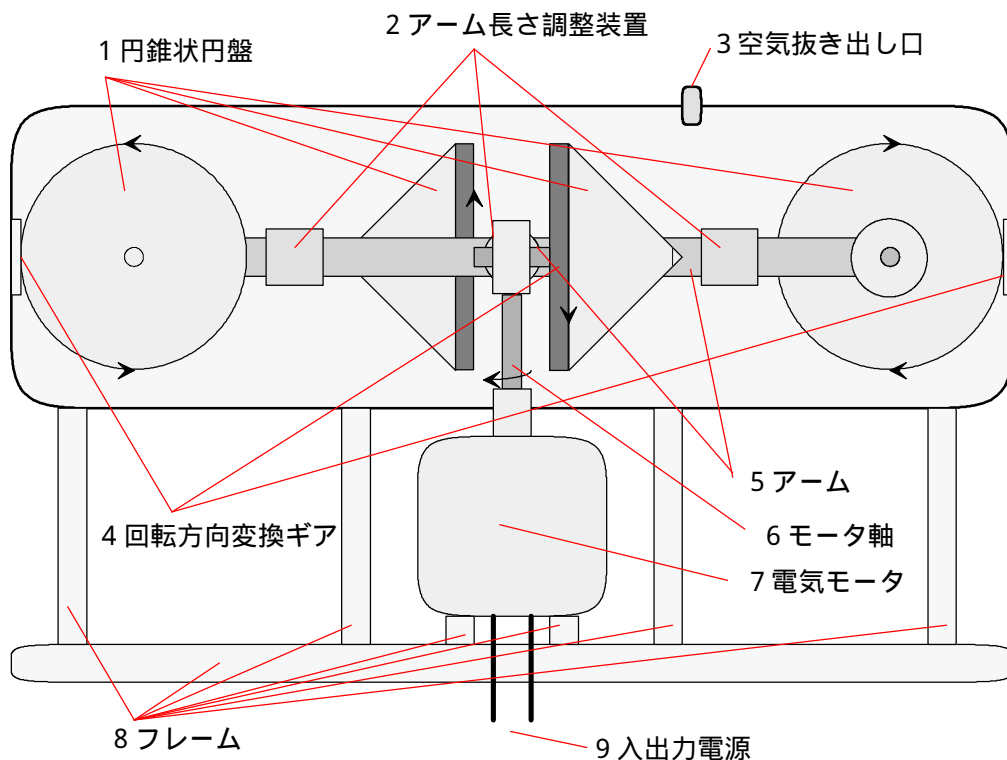


図16.5 重力発電機（側面図）

運転方法は以下の通りである。

入出力電源(9)から初期エネルギーを外部から注入し、電気モータ(7)を始動させ、モータ軸(6)を回転させる。
 モータ軸(6)を回転させることによりアーム(5)が動き出し、回転方向変換ギア(4)により円錐状円盤(1)も回転する。
 外部から注入したエネルギーによりモータ軸(6)の回転速度を増加させることに伴い円錐状円盤(1)の回転速度も増加する。
 円錐状円盤(1)の回転速度が速くなると、回転円盤の推進力の効果により、モータ軸(6)の回転速度を増加させる方向に力が働く。モータ軸(6)の回転速度が増加すると、それに伴い円錐状円盤(1)の回転速度も増加する。このため連鎖的にモータ軸(6)と円錐状円盤(1)の回転速度は増加していく。

の現象により電気モータ(7)への外部からの電力供給を止めても、モータ軸(6)の回転速度は増加していくため、以降、電気モータ(7)を発電機とし外部へ電力を取り出すことができる。

重力発電機により、まったくクリーンで、安全で、安定した無尽蔵のエネルギー源を人類は手に入れることができる。現代の人類の共通課題であるエネルギー問題は解決される。

さらにこの構造は小型化が可能であり、地球重力は利用していないため、宇宙船や人工衛星のエネルギー源としても利用できる。16.2項のような構造の重力推進機関のエネルギー源として利用できる。

16.4 重力による推進機関の速度

これらの推進機関は重力によって推進するものであるが、重力による加速は非重力による加速と著しく異なった特徴を示す。重力による加速の身近な例は、地球などの重力場での自由落下があるが、この場合、物体は明らかに加速されているのに、その物体内に設けた加速度計は加速していないことを示す。非重力による加速では加速度計を変化させずに物体を加速させることは不可能であるから、重力による加速と非重力による加速は基本的に異なっている。もし、限界速度というものが非重力による加速で存在するとしても、重力による加速にも限界速度があるとは限らない。

限界速度という考えは相対性理論から生じているものであるが、相対性理論は現実世界を反映しない理論であるから、限界速度ということの物理的な存在価値というものも失われたと考えねばならない。したがって、限界速度といったものは存在しないと考えるべきである。われわれは重力による加速には限界速度といったものは存在しないと考えている。重力による推進機関による飛翔体は、極めて高速で飛行できる可能性を持っている。

宇宙物理学の知識によれば、宇宙空間には宇宙線とよばれる極めて小さい微粒子が飛び回っているそうである。もし、宇宙空間を高速で飛行すると、この宇宙線と機体が激しく衝突し、機体とその乗員に著しい危害が加えられると予想されている。このような危険性に対しても、重力による推進機関の飛翔体には、それほど重大な損害は与えないだろう。この飛翔体は、言わば、落ちるように飛行するのであるから、飛翔体の近傍の微粒子も、同じように落ちると考えられるからである。

16.5 恐竜と人間はどちらが賢いか

木星への彗星衝突が観測されたことがあったが、そのエネルギーは膨大で、もし、地球に衝突すれば、全人類、あるいは地球上の全生物が滅亡してしまうほどである。このような彗星や小惑星は地球の周りにもたくさん存在しており、いつ地球に落ちてきてもおかしくはない。実際、恐竜が滅亡したのは、このような小惑星が地球に衝突したからであるといわれている。このような宇宙からの飛来物に対して、現在の人類はまったく無力であり、この点では恐竜と同じである。人類が恐竜よりも賢いというのであれば、恐竜の二の舞を踏むようなことは避けねばならない。もし、重力による推進機関による飛翔体が十分な速度や推進力を発揮するならば、彗星の地球への衝突を防ぐことも可能であろう。

重力による推進機関はいいことづくめで、如何にも嘘くさいが、危機を回避する可能性があるなら、やってみる価値はあるだろう。われわれの言っていることが嘘だと思えば、自分自身でジャイロを加工して実験してみたい。われわれの言うことは信用できなくても、自然の言うことは信用しないわけにはいかないだろう。

人類は恐竜よりも賢いと信じているが、自らを守るためには他を犠牲にしてもよいという生命体共通の性癖があるので要注意である。